

図1 症例1 抗ADHD薬X服用で症状とADHD-RSが著明改善した例

(ADHD-RSとは母なりが記入するADHD症状のチェック表)

服薬開始時9歳0ヶ月、その後12ヶ月間のADHD-RSの変化です。点数が高いほどADHD症状(不注意、多動衝動性)は強いことを示します。薬服用により、右肩下がりに不注意、多動衝動性、そして両者の合計点数は減少、つまりADHD症状は改善し、正常に近くなっています。

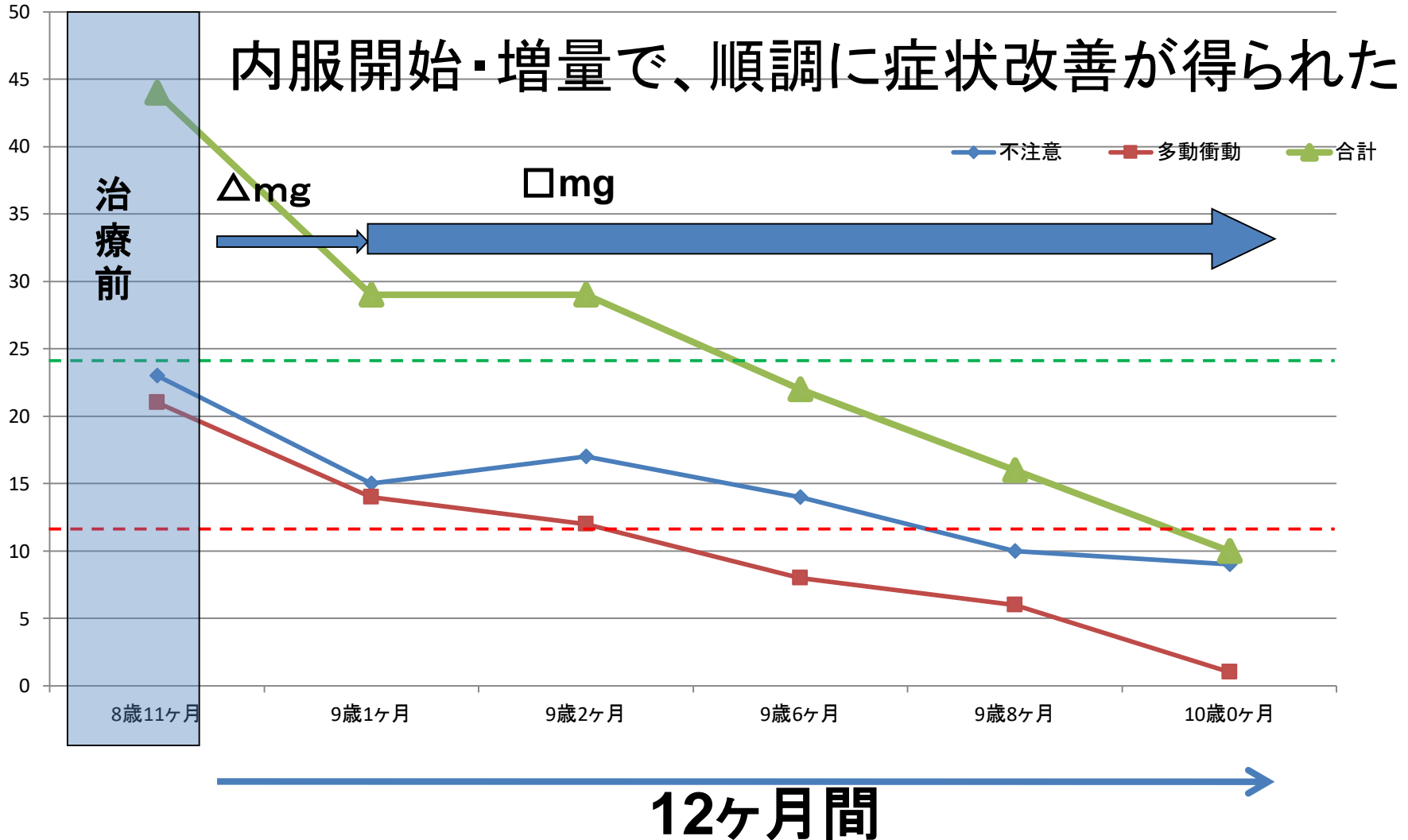


図2症例1

その後を含めた1年2ヶ月(9歳0ヶ月~10歳2ヶ月)のCPT経過

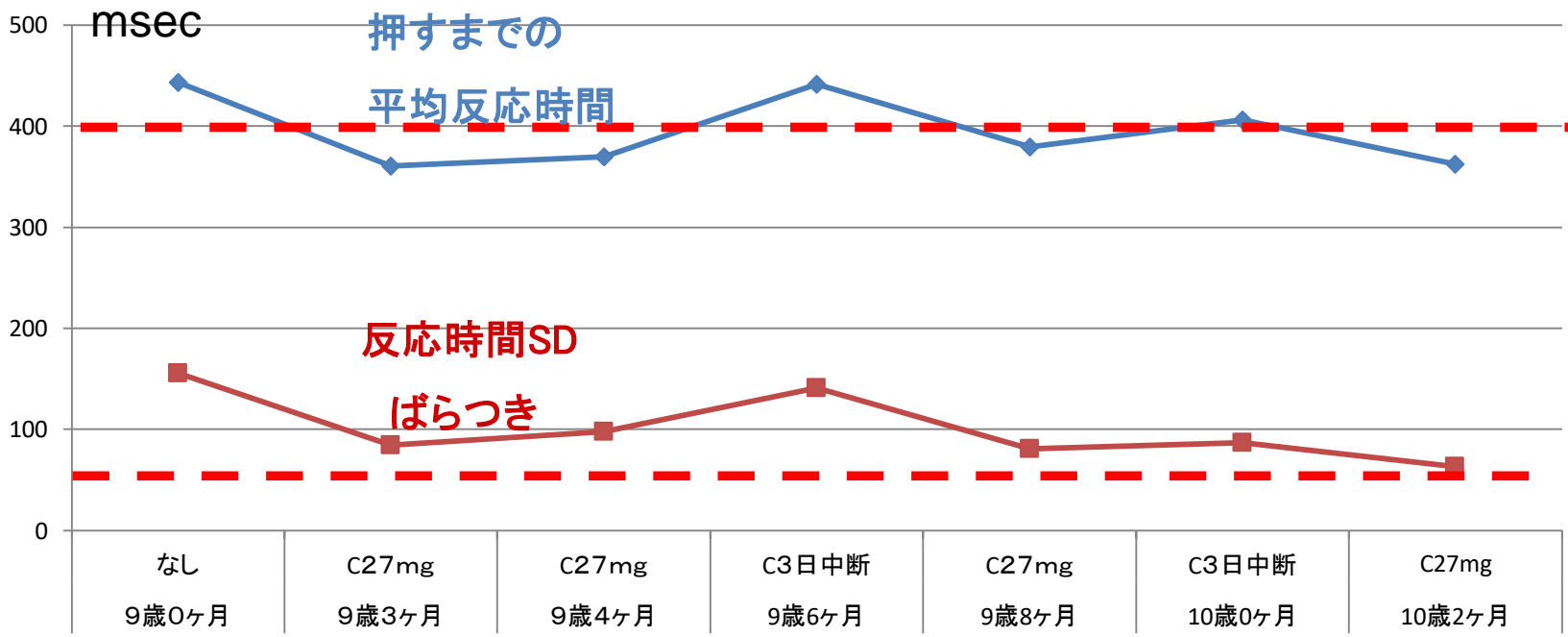
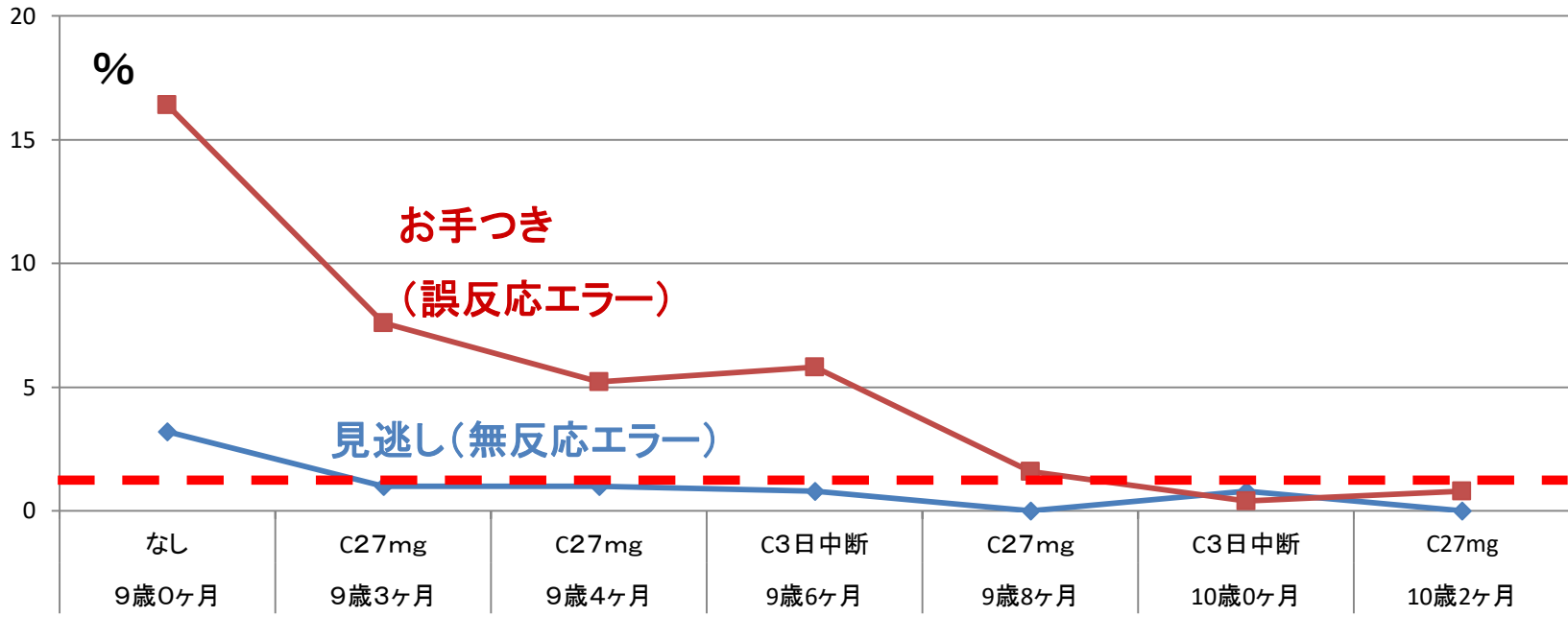
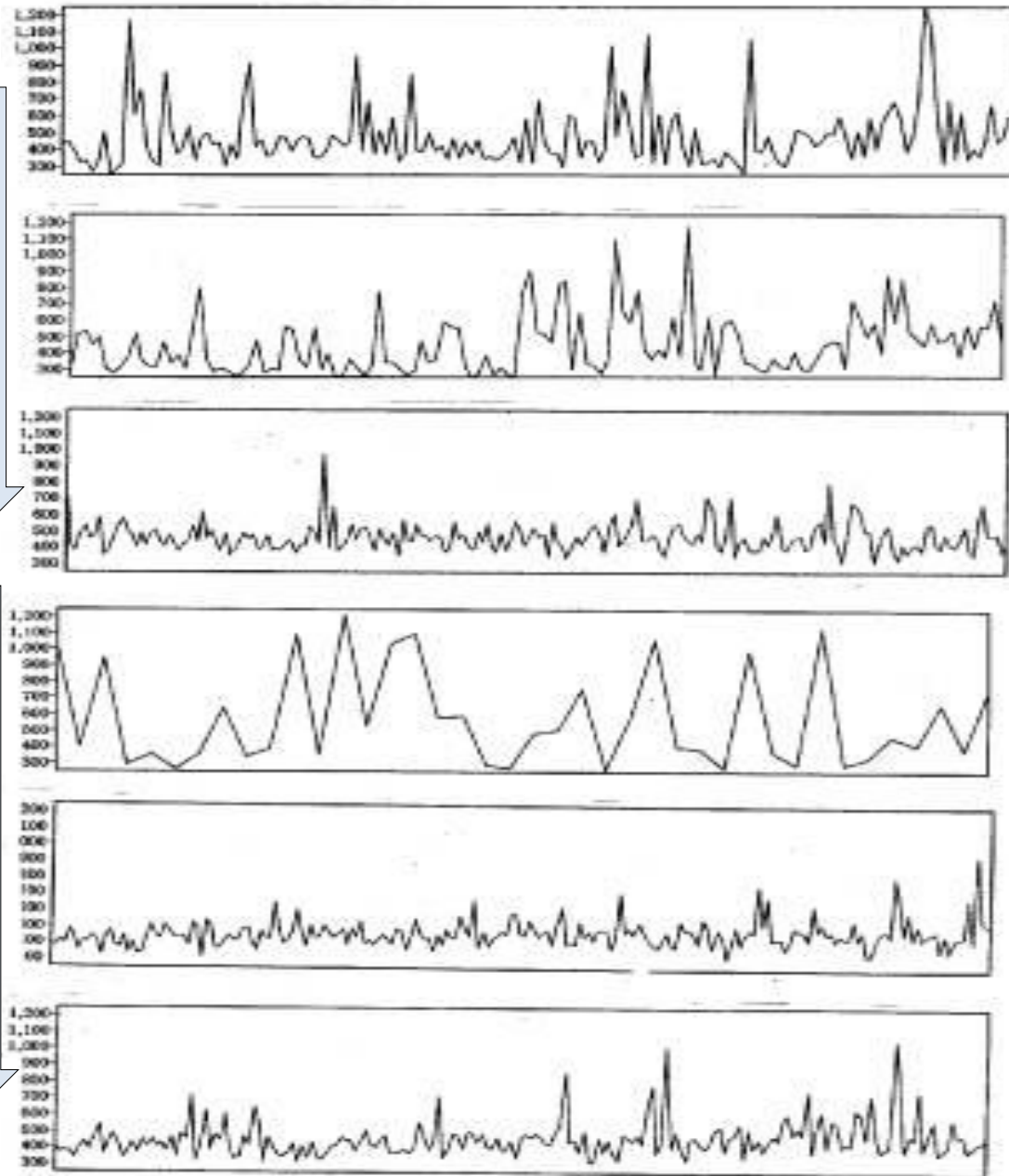


図3 症例2 治療開始時9歳0ヶ月男児 薬物治療1年間のCPT経過



服薬なし 9歳0ヶ月



内服薬A 9歳2ヶ月



内服薬B 9歳7ヶ月



4日中断 9歳9ヶ月



内服薬B再開 9歳10ヶ月



内服薬B増量 10歳0ヶ月

図4 内服とCPT結果が平行に動くモデル

内服→症状とCPT改善→中断で両者悪化→再開で両者改善

服用

開始→増量 中断 → 再開 → 減量・中止



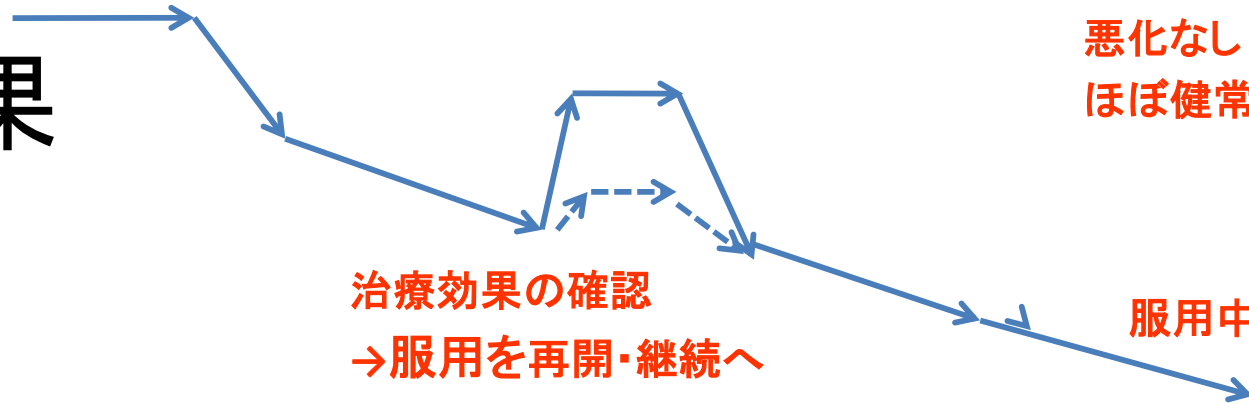
症状

病的症状 → 改善 → 悪化 → 再開で改善 → ほぼ症状寛解～消失
服用減量・中止でも悪化なし



CPT結果

病的なずれ → 改善 → 悪化 → 再開で改善 → 減量・中止で明らかな悪化なし
ほぼ健常範囲へ



治療効果の確認
→服用を再開・継続へ

服用中止へ と判断

加齢による改善や慣れはベースにあるはずですが、服用で急激に改善し服薬中断で悪化する中では……改善の主な要因は薬物ではないかと考えられます